

最近のペット事情



特集

1



兵藤 哲夫 Hyodo Tetsuo 獣医師

1963年横浜市にて兵藤動物病院を開設。ヒョウドウアニマルケア代表として公益社団法人日本動物福祉協会理事、公益財団法人神奈川県動物愛護協会理事などを歴任。

ペットをめぐる現状と課題

ペットと暮らす素晴らしさを多くの人に



今回はペットをめぐる現状と課題について、特に昨今注目されているペットと飼い主の高齢化に伴う現状や課題を中心に、獣医師の立場から述べたいと思います。

まず皆さんに訴えたいことは、ペットと暮らすことがいかに素晴らしく、楽しいものであるか、それを多くの人に味わっていただきたいということです。

ある人は「犬のいない天国なんて天国ではない」と言いました。ペットと暮らすことで、人は愛情や命の素晴らしさ、楽しい時間などさまざまな恩恵を受けることができます。

人間と人間との付き合いでは絶対に得られないものをペットから受けることができ、ペットが教えてくれることは無限で、何よりも代え難い価値があります。それをまず前提として、皆さんとその素晴らしさを分かち合うためにどうすべきか、飼育に当たってどのような問題や課題があるかを紹介します。

人もペットも高齢化が顕著



ペットに関する話題のベースとして、まずは

国内飼育頭数の推移からスタートしましょう。

ペットブームといわれていますが、実際、犬猫の飼育総数の推移では、犬がここ1年で平均約50万頭ずつ減っていることが最大の特徴です。一般社団法人ペットフード協会が発表している飼育頭数の推移では2008年に最高で1310万1000頭までいた犬が徐々に減って、2016年は987万8000頭となっています(図1)。

猫に関しては、同協会の実態調査では2016年に984万7000頭で、数字的には横ばいですが(図2)。同協会では今後、猫の飼育頭数は犬を超して逆転傾向にあると考えています*1。

では、なぜ犬が減ったのかというと、まずは自然減少です。同協会の統計をみると、高齢期である7歳以上の犬の割合が2012年は全体の50.3%でしたが、2016年には全体の56.8%と微増しています(図3)。これは寿命が尽きて減っている、つまり自然減少によって犬が少なくなったということです。

もう1つは飼い主の高齢化です。病院にも「犬が大好きでずっと犬と一緒に暮らしてきました。でも、自分はもう高齢なのでこの子がきっと最後で、次はもう飼えないわ」という飼い主

*1 毎日新聞「飼育実態調査 止まらぬ飼い犬離れ 猫と変わらずかペットフード協会調査」(2017年1月18日朝刊)

図1 全国の犬の飼育頭数(飼い主が20～60歳代)*2

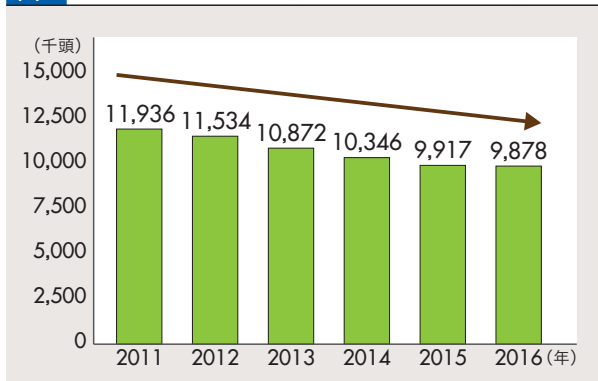
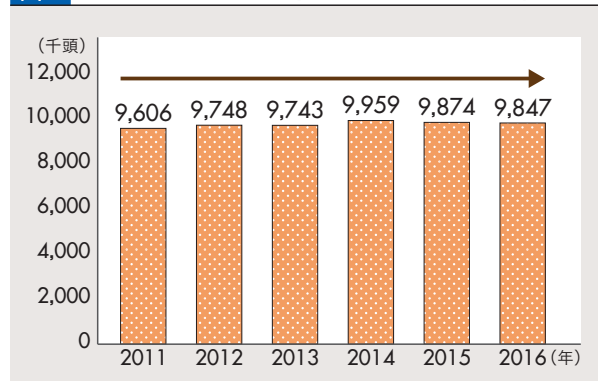


図2 全国の猫の飼育頭数(飼い主が20～60歳代)*2



はたくさんいます。人間と犬の高齢化が頭数の減少につながっています。

飼い主の高齢化により散歩や犬の世話をすることが体力的に難しくなっていると同時に、最近では各自治体の動物愛護センター、あるいはボランティア団体の行っている譲渡会などでは、年齢制限を設けて高齢者のみの世帯ではペットを譲渡してもらえないようになっていきます。

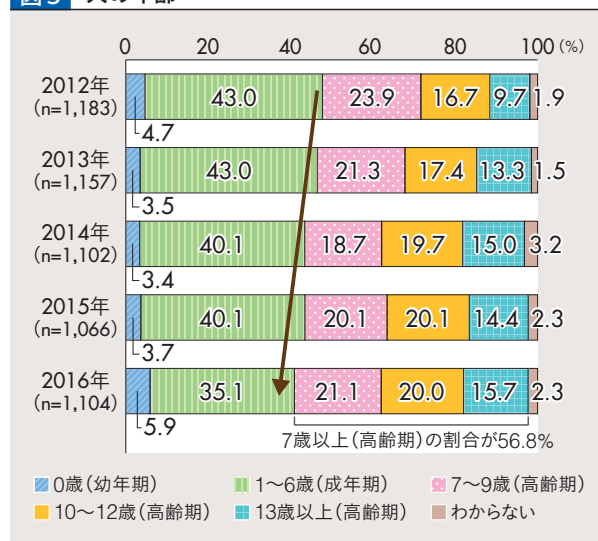
日本の少子化が加速し、人口構造が高齢化にシフトしている一方で、高齢者だけではペットを飼育できない状況にあります。つまり、日本では大多数の人がペットを飼いづらい社会になってしまったわけで、ペットの飼育頭数が減少してしまうのも当然といわざるを得ません。

ではペットの長寿化(高齢化)を実現させた要因は何でしょうか。さらに消費生活に関する視点から何が問題になっているかを紹介します。

私見ですが、犬種にもよるものの、昭和40年代には10歳前後だった犬の寿命が、現在は15～17歳に伸びたようです。これは飼い主の意識やペットを取り巻く環境の変化が大きく影響しているのでしょう。

特に家の中でペットが快適に過ごせるようになり、ペットの飼育環境は大きく改善されました。家の外で太い鉄の鎖でつながれて番犬の役割をさせられていた犬が、コンパニオンドッグ

図3 犬の年齢*3



となり、家の中で家族として生活するようになって、犬の寿命は急速に伸びています。

ペットの食事も変化しました。年齢別や犬種別に改良されたフードにより、健康で長生きできる食生活が可能となっています。

さらに我々動物医療側の努力もあります。パルボやジステンパー、フィラリアといった死に至る病気が予防できるようになり、これまでは治療が難しかったがんや心臓病などの病気も徐々に克服できるような時代になりました。救急医療が発達し、交通事故でも命を救えるような医療体制へと変化しています。MRIやCTといった診断設備も充実してきて、救える命が増えつつあります。

*2 一般社団法人ペットフード協会の「全国犬猫飼育実態調査」(各年版)(<http://www.petfood.or.jp/data/index.html>)をもとに、国民生活センター広報部作成。

*3 一般社団法人ペットフード協会の「平成28年(2016年)全国犬猫飼育実態調査」(<http://www.petfood.or.jp/data/chart2016/2.pdf>)をもとに、国民生活センター広報部が加筆。

ペットの長寿化に伴い、費用負担が増加



ペットの長寿化が飼い主に新たな負担を強いている側面もあります。

長寿化すればするほど病気やけがのトラブルは増えていきます。さらに医療が高度化するにつれて、飼い主の費用負担は重くのしかかります。

皆さんもご承知のとおり、動物医療に関しては人間と違い公的な国民健康保険制度が適用されておりません。治療費は院長の裁量で決められることが多く、内視鏡やヘルニア手術などの複雑な手術に関しては数十万から百万円単位と、人よりも治療費は高くなります。

高度医療の発達とともにペット保険が普及しました。しかし、保険に入っていれば安心かというところでもなく、高度医療に使えるような保険では掛け金は高くなります。また、保険が適用されない病気やけがが指定されている場合もあり、さらにある年齢以上には適用されないなど、入っていたら安心というわけにはいきません。

どの保険がよいのか、そもそも保険に入るべきかそうでないかについての相談はホームドクターと呼ばれる獣医師の意見を参考にさせていただきたいのですが、健康なときに病院で病気や保険の相談をしようという飼い主は少ないのが現状です。ホームドクターの勧めについては後で詳しく解説したいと思います。

新しいサービスも登場



最近、ペットを飼う高齢者向けの新しいサービスとしてペットのための信託サービスが登場しました。飼い主の遺産を、飼っていたペットのために使うもので、遺産の一部を信託の管理会社に預け、そこから飼育にかかる経費を支払うというシステムです。さらには介護が難しい大型犬の老犬ホーム、老猫ホームも登場しています。

業界内ではこうした新しいサービスに対して

はまだ評価が確立しておらず、飼い主たちも今はようす見の状態です。ホームに関しては継続して質の高いサービスが受けられるかがポイントになると思いますが、始まったばかりでどう進展していくのか、私自身も見守っています。

とはいえ、一人暮らしの飼い主が亡くなった後、残されたペットが幸せに暮らすことができるかどうかは切実な問題です。多くの場合、残されたペットは家や土地といった財産と一緒に子や孫に相続されていますが、相続人がいない、あるいは相続不可の場合はそのまま遺棄されてしまうこともあります。室内飼いで餌を人から与えられていたペットが野良になって食べ物を捕まえることはできません。野良にすることはペットにとって虐待で、絶対に避けなければいけない事態です。

飼い主の側も、自分だけは大丈夫だと考えずに、万一に備え、友人・知人など譲渡先を探し、愛護団体などに相談しておくことも大切です。さらに解決方法の1つとして、掛かりつけ医、すなわちホームドクターの存在があります。

ホームドクターの存在が飼い主の問題解決につながる



「国民生活」読者の皆さんは消費者に寄り添った仕事をされています。特にペット医療の費用に関する問題や、残されたペットの行方などを相談された場合に、ホームドクターの存在が役に立つことを、この機会にぜひ知っておいてほしいと思います。ホームドクターは掛かりつけの信頼できる近所の獣医師のことです。

医療に関する問題についても、飼い主と獣医師が十分なコミュニケーションをとっていれば、飼い主がどのような経済状況でペットに何を望んでいるかを互いに理解することが可能です。互いに信頼関係を築いていけば、飼い主の経済状況に見合った支払い方法なども、考慮してもらえるかもしれません。

高齢のペットだったら、やみくもに高度医療

に突っ走るよりも、痛みを緩和して寿命を^{まっ}全うできるようなケアのほうがよい場合もあります。苦しい治療をして、食べたくない食事を無理強いさせられるより、静かに水を飲みながら旅立つほうがペットにとって幸せであるケースも少なくありません。

ペットと1分1秒でも長く一緒にいたいという飼い主の気持ちは理解できますが、それがペットのためになるのでしょうか。現在の状況を冷静に見て、正しく判断できるのは、ホームドクター、すなわち掛かりつけの獣医師です。

治療に関しても、高度医療を提案できる飼い主かそうでないか、経験のある獣医師であれば判断することは可能です。ただし、獣医師が判断してそれを提案しても、飼い主の側が納得できないこともあります。飼い主に理解してもらえないと感じるため、安楽死もなかなか言い出せないのです。

治療や治療費等に関する問題を解決するためには、信頼のおけるホームドクターの存在が不可欠です。万一時、飼えなくなったペットをどうするか、治る見込みのない病気になったとき、どうすればよいかを知っているホームドクターの存在が、いざというときに力になります。

トラブルをゼロにする知恵



高齢化や高度医療に関する問題は比較的新しいものですが、ペット購入に関する消費者トラブルは古くからあり、いまだに解決の難しい問題の1つです。消費生活センターに寄せられるトラブル発生件数も横ばいのようです*4。

しかしながら、飼ってすぐに病気になって死んでしまうような感染症に関するトラブルは激減しています。これはブリーダーやショップに関する法的規制が厳しくなった結果です。

規制の一方で、趣味の範囲で繁殖させていた人たちにも登録義務が発生したため、その人た

ちが繁殖をやめ、需要と供給がアンバランスとなってしまいました。そのため、繁殖コストが非常に高くなり、子犬や子猫の値段は近年、急騰しています。高額だからこそ、飼った後でトラブルが発生した場合の解決が難しかったり、問題が長引く要因になっているようです。

とはいえ、ペット価格の高騰は衝動買いを防ぎ、治療費など高いペットの維持負担に耐えられる高所得者層を増やすことになると考えている人もいます。ペットの価格高騰は新たに浮上してきた難しい問題の1つでもあります。

このほか、ペットホテルやトリミングなどペットに関するトラブルの大半は、サービスを受ける側と提供する側の意志疎通が不足している場合に起きることが多いようです。イメージで伝えるよりも、実際にモデルの写真やイラストで指示した方が理解できます。さらには、「背中のカットが嫌い」だとか、「頭をなでてもらうのが大好き」という飼い主だけが知っているような小さなヒントも、カットをするトリマーにとっては大きな手助けになることが多いのです。トラブルを未然に防ぐには、飼い主の側から相手にできるだけ情報を伝えることが大切です。

日本のイメージを ペットを通じて世界へ



ペットの取り扱いを見るとその国の文化的レベルが分かるといわれています。2014年、ソチオリンピックではロシアの放浪犬対策が問題になり、アメリカ人ガス・ケンワージ選手が野良犬を持ち帰ったエピソードが全世界に広まりました。ロシアという国のイメージをひどく傷つけた事件でもあります。2020年、東京オリンピックではぜひ、人とペットに優しい国ニッポンとして世界中の人たちに認識してもらえよう、私も微力ながら努力していきたいと考えています。

*4 ウェブ版「国民生活」2017年6月号 特集3参照